潜入！ねぶた小屋

3年ぶりのねぶた祭。久々に夏がきたと感じている人も多いのでは？

祭りの主役である大型ねぶたは、ねぶた師一人の力では作れません。日本有数の夏祭りは、たくさんのボランティアやアルバイトスタッフに支えられています。大型ねぶたはどんな人たちが、どんなふうに作っているのでしょうか。令和4年ねぶた大賞をはじめ数々の実績を持つ、ねぶた師竹浪比呂央さんのねぶた小屋で、紙貼り作業を体験してみました。

3年ぶりの夏祭り

募集しなくても

6月中旬。青森市のアスパム隣、青い海公園に立ち並んだねぶた小屋の中で、着々と大型ねぶたの制作が進んでいました。令和4年、竹浪比呂央ねぶた研究所が担当する大型ねぶたは3台。竹浪さんが2台、弟子の手塚茂樹さんが1台で、ねぶた師やスタッフたちは計3つの小屋を行き来しながら作業を進めています。

東北三大祭りとして有名な「青森ねぶた祭」。
国の「重要無形民俗文化財」にも指定されている。

ラッセランドと呼ばれるねぶた小屋群は、春から夏にかけて建てられます。小屋が建つと、自然に毎年お馴染みの顔ぶれが集い、今年の作業の打ち合わせを始めます。アルバイトやボランティアスタッフのほとんどは、仕事や家事の合間を縫って小屋に通っています。「そろそろ来てとこちらから連絡しなくても、みんな自発的に集まってくれて、できることをやって帰ってくれる」と手塚さん。「ねぶたが暮らしの一部になってるってことなんだと思います。ねぶたは人々の思いによって成り立っていると感じる瞬間ですね」。

ねぶたの紙貼り作業。3時間で10枚ほど貼ることができた。

気の遠くなる作業

早速、紙貼りチームのリーダーである女性に指導を受けます。スタッフ自前の持ち物は①ハサミ②カッター③タオル。ハサミもカッターも市販の工作用のものでOK。タオルは手についたボンドを拭うので、汚れて捨ててもよいものを用意します。

ねぶたは組んだ木材に針金で骨組みをし、それに和紙を貼って形を作っていきます。この和紙を貼る工程が「紙貼り」です。マス目状になった針金に和紙を押しつけ、型取り。型通りに切った紙のフチにボンドを付け、針金に和紙を貼る。障子の張り替えのようなイメージでしょうか。

ベテランのスタッフたちが付きっきりで教えてくれますが、慣れないうちは一マス貼るのに15分以上かかりました。マス目の形や場所、大きさによっては何度もやり直し。ベテランの手を借りても難しいものもありました。

あの巨大なねぶたが、数十センチ四方の紙を貼ったマス目の集合体だと思えば、途方もない作業だなと改めて実感しました。

女人禁制の祭り例

- **田名部まつり（むつ市）**
  近年、女性がヤマを曳くことは許されているが、ヤマに乗ることは許されていない
- **祇園祭（京都市）**
  一部の山鉾には女性の囃子方がいるが、巡行の先頭に立つ長刀鉾などは女人禁制
- **竿燈（秋田市）**
  竿燈の差し手は男性のみ
- **博多祇園山笠（福岡県）**
  小学生以下の女児は男性同様の扮装（締め込み）で参加OK
- **岸和田だんじり祭（大阪府）**
  女性がだんじりに乗ることはできない

ねぶた小屋への誘い

スタッフたちに、ねぶた小屋で作業に参加するようになったきっかけを聞いてみると、人によって様々。知人の紹介や口コミ、最近ではSNSを通じて竹浪さんと知り合ったという人も。ふらりとねぶた小屋に見学に来て、そのままの流れで…というパターンもありました。

それぞれの作業工程ごとに作業リーダーがいて、各自の適性などをみながら人を割り振ります。入って日の浅いスタッフも、来られる時間に来て、できる範囲の作業をします。ワンシーズンに数度しか顔を出せない人も、毎日朝から晩まで作業する人もいるそうです。

竹浪さんは「とにかく色んな人たちに、ねぶたに関わってほしい」と話します。「ねぶたは限られた氏子や企業のものではなく、市民のもの。裾野を広げ、後継者を育成し、ねぶた文化を未来へ繋ぎたい」という思いを持ってねぶた師として活動しているそうです。今年はコロナ禍の中での開催だったため、誰でも気軽にねぶた小屋の中に入れるわけにはいかず、忸怩たる思いがあったとのこと。

ねぶた師たちもスタッフたちも、口を揃えます。「来年の今頃は、きっと情勢が良くなっているはず。そうしたら、ぜひ気軽に小屋を覗いてみて」。

①木工用ボンドを指先に適量つける。

②針金の幅よりちょっと広い程度にボンドをフチに細く塗る。

③一片ずつしっかりと貼っていく。

「祭り」と「女人禁制」

令和３年、東京オリンピックの聖火リレーで、愛知県半田市を舟で通るコースが男性限定となっていることが物議を醸しました。半田市で行われる聖火リレーのうち、半田運河を舟で通るコースのランナーが「男性限定」で募集されていました。この舟は「ちんとろ舟」と呼ばれ、子供が乗って舞を奉納する「ちんとろ祭り」は、江戸時代から続く伝統行事です。このちんとろ舟が伝統的に女人禁制ということで、聖火リレーのランナー選びもそれにならったのです。それに対し、男女平等を掲げるオリンピック精神に反するのでは、と疑問の声が上がり、最終的に半田市が方針を転換。女性も応募可能となりました。

青森ねぶた祭では、平成24年に北村麻子さんがデビューするまで、ねぶた師は「男の仕事」とされていました。力仕事が多く、モチーフも勇ましい武者や絵物語が主流ということもあり、長年、女性には向かない仕事とされていたのです。女はねぶた師になれない。これは300年もの間、暗黙の、しかし鉄壁のルールでした。

しかし、ねぶた小屋の中に入ってみると、聞こえるのは女性たちの和やかな談笑の声。紙貼り、骨組み、針金の修正、ロウビキなどあらゆる作業の中心やサポート役に、たくさんの女性の姿があります。特に紙貼りは伝統的に女性の仕事で、ベテランになるとねぶた師の絶大な信頼のもと、作品の核となる部分のほとんどを任されます。ねぶた師の手塚茂樹さんによると、スタッフ全体で見ても６対４か７対３ぐらいの割合で女性の方が多いといいます。「ねぶた制作は、高所や狭いところでの作業が多いので、小柄で身軽な方が向いているんです。」と手塚さん。外側から見るほど「ねぶたは男の世界」というわけではないようです。

祭りによっては、女性たちは飯炊きやお茶汲みなどの裏方に徹したり、山車や神輿に触れてはならないという掟があります。これは単に差別意識というよりは宗教的価値観に基づくもので、全国的に根強く残る風習です。

そんな中で、ねぶた制作において女性が果たす役割の大きさには目を見張るものがあります。ねぶた祭本番でも、囃子方、跳人の中に男女は関係ありません。そういえば、衣装の浴衣すら男女兼用。実はねぶた祭は、男女共同参画の観点から言えば、ものすごく先進的な祭りとも言えます。